

2022 年 8 月 31 日(水)

## 私の夏の課題図書

しばらく「校長ブログ」の更新を怠っており、失礼いたしました。ただ、この間もいくつかニュースを作成しておりましたので、ここではタイトルだけでも紹介しておきます。

- 文学のもつ意味
- 暑い地域ってどこ…？
- クイーンと花火 ～府中花火大会に寄せて～
- 消えゆく昭和の姿 1 ～岩波ホール閉館～
- ライブラリーのある宿
- 消えゆく昭和の姿 2 ～アンナミラズ閉店～
- 感動をあなたに ～夏に見た映画と演劇から～
- 調理(和菓子)研修会に参加して

さて、昨年も紹介したように、教員となって以降自らに課す夏の課題として「戦争に関連する図書を最低 2 冊は読む」ことにしています。今年もコロナ禍のため自宅と学校との往復だけで、遠出することもなかったため例年以上にゆっくり本を読む機会に恵まれました。未だに戦禍の続くウクライナ戦争をはじめ、現実にも目を向けて行くためにも、想像力を鍛える上でも読書の持つ意味は大きいと言えます。そこで、この夏、私が読んだ「戦争に関連する図書」を紹介しておきます。

まず、最初の 2 冊は、戦禍における図書の役割を教えてくれるものです。焚書がいかに人類の文化的活動を阻害していくのか、その対局として極限状況にあっても心のゆとり、自由な発想の大切さを教えてくれます。つぎは、スペイン内戦に志願兵とした参加した日系人の話です。その存在はあまり知られていませんが、その半生を知人として描いた作品と、研究者として丹念な手法で迫った作品との対比です。また、戦争に直接関与したものではありませんが、人類最初の無差別爆撃を批判したピカソの作品をテーマにした人気作家によるサスペンスも紹介しておきます。

最後に、ノンフィクション作家による旧ソ連時代のシベリア強制収容所における実在の人物:山本 幡男に関する小説は、戦争とは何か、人間とは何かを問う意味で読み応えのある作品です。このように一つの図書を手にすることで、次々に新しい図書の存在を「芋づる式」に教えてくれます。これも読書の楽しみの一つでもあり、探究学習にも通じ、視点を広げることに役立ちます。

◆モリー=グプティル=マニング,松尾 恭子訳(2018)『戦地の図書館—海を越えた一億四千万冊』創元ライブラリ, 336ページ。

第二次世界対戦時、ナチス・ドイツは発禁や焼却によって1億冊を超える書物をこの世から消し去った。これに対してアメリカは、戦地の兵士用に約1億4千億冊のペーパーブックを送り続けた。政権による発想の違いと読書の意義について記した感動の図書。

◆デルフィース=ミヌイ,藤田 真利子訳(2022)『戦場の希望の図書館—瓦礫から取り出した本で図書館を作った人びと』創元ライブラリ, 227ページ。

フェイスブックに載った1枚の写真に引き寄せられるようにシリアに飛び、内戦の最中であって爆撃の瓦礫の中から数千冊の本を救い出して図書館を作ったシリアの若者アフマドの行動を描く。

◆石垣 綾子(1989)『スペインで戦った日本人』朝日文庫, 315ページ。

1930年代後半のスペイン内戦に、多くの外国人が自由と民主主義を求める人民戦線・共和国軍に賛同し、独裁者フランコとの戦いに参戦。その一員として志願し、戦死した日系人ジャック白井の半生に、ニューヨークで白井と親交があった作者がその実像に迫る。

◆川成 洋(2013)『ジャック白井と国際旅団—スペイン内戦を戦った日本人』中公文庫, 339ページ。

スペイン内戦に義勇兵として参戦し、1937年7月11日、マドリド西方40kmのブルネテにて銃弾に倒れたジャック白井について、研究者の視点から詳細な資料調査に基づき、「1930年代史」の一コマとして白井の実像とスペイン内戦の客観的評価を描く。

◆原田 マハ(2018)『黒幕のゲルニカ』新潮文庫, 410ページ。

ニューヨークの国連本部に飾られた反戦絵画の代表ピカソの「ゲルニカ」が盗まれた。MoMAのキュレーター八神瑤子はこの絵画を巡る陰謀に巻き込まれていくアートサスペンス。

◆辺見 じゅん(1992)『収容所から来た遺書』文春文庫, 297ページ。

敗戦から12年目に遺族に届いた6通の遺書。ソ連軍に捕われ、極寒と飢餓と重労働のシベリア抑留中に死んだ知性と人間性に迫る。瀬々 敬久監督、二宮 和也・北川 景子主演ので映画は年末公開。河合 克夫(2022)の漫画『ラーゲリ』文春コミックスもある。